と解読の可能性が開けるように思われるからである。しかし，その問題とは裏腹に，写真で「思想の表出」，とくに「生きられる空間」を表現しようとするとき，その場所に特有の事象の表現と解読という新たな課題が登場しよう。

以上をふまえて撮られた「地理写真」の事例が第V章に示されている。そこでは，単に1点の写真によるだけではなく，組写真，時系列に並べられた写真，2地点の同じテーマの写真，季節の違う写真など，提示の仕方を凝らして，著者の意図するところを表現しようとする。しかし残念なのは，これらの写真の解説が，技術論に傾いている点である。「地理写真」の本質論に関する部分で著者が強調していた「生きられる空間」の解説がもう少しあれば，著者の「地理写真」の真価が発揮できたはずである。

第2部では，著者は，「地理写真」の歴史が地理学の大きな潮流と見事に対応していることを指摘する。写真が＜言語＞であるとすれば，その歴史は地理学における＜言語＞の歴史といえる。その意味で，それは特殊地理学史として捉えることができる。景観を研究対象とする景観地理学の時代の隆盛，場所の具体性を廃し，機能を重視し，抽象化を指向する計量地理学以後の衰退，人間の側から空間を捉え直す人文主義地理学における復権，という「地理写真」の歴史は，地理学における＜言語＞の揺れ動きに他ならない。

第3部は，いわば理論的な前2部に対する実践篇である。ここでは著者の経験から生まれたテクニックの一つ一つを懇切丁寧に指導してくれる。現地調査では，そこの景観や遺物，遺跡，さらに資史料等の撮影が欠かせない。それらの写真が研究上の強力な武器になるか無用の長物となるかは，その撮影技術にかかっているとさえいえる。このようにして撮られた写真は，研究資料としての利用に耐えられることはもちろん，著者のいうように，学会発表時などのスライド使用で，「見にくいですが」という言葉をなくすことになるだろう。

本書に収められた写真の中には，戦後間もなくのものも少なくない。著者は『日本地誌』（二宮書店）や雑誌『地理』，さらには『地域を写す 石井賞地理写真集』（古今書院）などで数多くの優れた「地理写真」を発表し，近く2冊目の写真集を刊行されると聞く。長年，「地理写真」を撮り続けた著者の元には，ここに収録されていない貴重な写真があるに違いない。これらは，歴史的にもたいへん貴重である。

写真の歴史もすでに150年，歴史資料として貴重な写真が蓄積されていることであろう。しかもその間の景観の変化は著しい。近年，『百年前の日本』『モースの見た日本』（以上，小学館），後藤和雄・松本逸也編『ライデン大学写真コレクション 甦える幕末』（朝日新聞社），石川光陽『痛恨の昭和』（岩波書店）など，史料としての写真集の出版が相次ぎ，写真の史料としての価値が高まっている。今後，歴史地理学においても，古文書だけでなく，古地図や絵画などとともに，ヴィジュアルな歴史資料として写真の利用が期待されているといえよう。

本書で触れられた写真の解読などの試みは，このような歴史地理学研究における写真利用の課題に答えるための出発点になる。ただ，この点で気になることは，著者が「地理写真」を撮影者の側に立って定義していることである。写真を利用する立場に立てば，撮影者の意図に関わりなく，そこに地理学的に貴重な事象が写っていれば，それもまた十分に「地理写真」とはいえないだろうか。これまでに蓄積され，今後もさらに蓄積される写真を史料として取り込んでいく可能性を考えるとき，その定義を限定しない方がよいと考える。

ともあれ，本書の価値は，第1にその写真にある。長年の経験に基づいた，本書に掲載された100点を越える写真は，どれも十分に「読み」ごたえがあり，言語に尽くせない説得力がある。それを言語で評することの矛盾を感じながら筆を置くことにする。

（青山宏夫）

福井市　編：

『福井市史　資料編別巻　絵図・地図』

福井市　1989年3月

A4判　268ページ　8,100円

近年，自治体史のなかに絵図資料集を加える例が多くなったことは，すでに本誌143号において橋本直子氏が『都留市史 資料編 都留郡村絵図・村明細帳集』の書評のなかで指摘している。本書もまた，こうした意欲的な自治体史のひとつであり，同時に歴史地理学にとって関心の高い土地柄ゆえに，まさに待望の絵図資料集の刊行となった。

昨今の自治体史の絵図資料集は，その編集にさまざまな工夫が凝らされるようになっている。この点

についての本書の特色は，一般読者の便をも考慮したトレース図版がほとんどみられない物足りなさを感じさせるものの，細部の文字も読み取れるようにＡ４判の判型の利点を活用した大きさで絵図をカラー掲載し，さらに位置を対照できるように地形図を添えるという配慮がなされている。

まず，本書の構成に従い，収録された絵図・地図について紹介していく。

○はじめに

1. 古代・中世（正倉院所蔵「足羽郡道守村開田図」「足羽郡糞置村開田図」と奈良国立博物館所蔵「坂井郡高串村東大寺大修多羅供分田図」の開田図ほか，『大乗院寺社雑事記』中の越前国河口・坪江庄関係略図と，幕末の絵図ではあるが，朝倉氏有力家臣の屋敷跡などを描いた安波賀春日神社所蔵の「一乗谷古絵図」を収録。）
2. 国絵図（慶長国絵図の控え本と想定される慶長10年頃の国絵図，正保国絵図を踏襲した貞享２年の国絵図，元禄国絵図に類似した元文期の国絵図を収録，いずれも松平文庫所蔵。）
3. 城下絵図（松平文庫，福井市立郷土歴史博物館などに所蔵されている福井城下絵図の中から10点が収録されている。このほか，貞享２年「福居城下絵図」を折込みで収録。）
4. 町絵図（「神宮寺町組絵図」など福井城下の現存する町絵図５点を収録。）
5. 城郭図・屋敷図（「天守絵図」や「本丸指図」など８点を収録。）
6. 寺社境内図（結城家の菩提寺である孝顕寺と４代藩主松平光通の発願による大安寺の指図など５点を収録。ただし，このうち明治５年「愛宕山元除地検地絵図」は，絵図の分類上では８の「検地分間図」に入れるべきであろう。）
7. 村絵図（飛騨郡代支配の天領においては，天保年間の耕地絵図が郡代の代替わりを契機に百数十点作成された。この耕地絵図２点を含む６点の村絵図を収録している。）
8. 検地分間図（明治前期の検地分間図ならびに地籍図を９点収録している。なお，検地分間図については特筆すべき事項と考えられるので，詳細は後述する。）
9. 浦絵図・漁場図（幕末の越前海岸防備絵図である「越前国浦々ノ図」「越前海岸絵図」，浮遊物の陰に集まる習性を利用した特殊な漁法で知られる鰭漬漁を示した「鰭漬木場山当図」，明治20年代の「三里浜地引網漁業申請図」「三里浜入会漁場図」など６点を収録。）
10. 河川図（治水を目的として描かれた藩政期の絵図を中心に，明治10年代後半に作成された「越前三大川沿革図」，ならびに九頭竜川の河川改修を目的に作成された明治３年「高底川形麁絵図」を収録。ただし，河川交通に関する絵図は未発見であるという。）
11. 水利図（足羽川右岸から引水される「酒生用水絵図」をはじめ，「三ツ屋用水改図」「九ケ用水絵図」など７点の農業用水に関する絵図が収録されている。）
12. 道中図（松平春嶽の海岸御備場巡視の際に作成された「海岸巡視水陸路程図」，春嶽の藩政改革を推進した中根雪江所用の「京阪街道一覧」のほか，近世中期以降と推定される「江戸・福井道中図屏風」を収録。）
13. 相論図・境界図（沼池の利用をめぐって福井藩領の村と幕府領の村で起きた元禄12年「どす池相論裁許絵図」など５点を収録。）
14. 明治期行政区画図（石川県福井支所地租改正事務所によって作成された「足羽郡全図」，明治22年市町村制施行後の行政区画を示した「越前国行政区画地図」と「吉田郡全図」を収録。）
15. 市街図（明治22年市制施行直後の市街地を表現した24年「福井市街全図」，羽二重機業が盛んであった時期の大正11年「福井市街地図」，昭和８年の第31次陸軍特別大演習を記念して作成された「福井市街鳥瞰図」と折込み「福井市街全図」，第２次世界大戦前の都市計画を示す昭和12年「福井都市計画図」，戦後の21年「福井戦災復興都市計画図」など，空中写真を加えて福井市街地の発展を的確に捉えることができる。）
16. 地形図（２万分の１迅速測図と５万分の１地形図５点を収録。）

○付録図解説（折込み――貞享２年「福居城下絵図」，昭和８年「福井市街全図」）

○総　説

以上の内容紹介からも窺えるように，２の国絵図から13の相論図・境界図までが近世に作成された絵図であり，当然のことながら福井県立図書館松平文庫所蔵の絵図が半数近くを占める。しかしながら，市街図や地形図・空中写真を盛り込んで，本書は古

代から現代までを一書におさめた，まさに目で見る福井の景観変遷史に仕立てた点を特筆する必要がある。また，収録した絵図・地図の一点一点に詳細な解説が加えられ，福井市史参与小林健太郎氏の執筆による総説によって，本書に収録された絵図・地図についての適切な位置付けがなされていることも，本書の価値を高めているといえよう。

本書に収録された絵図・地図のうち，開田図，国絵図，城下絵図はつとに著名な絵図であるが，本書で新たに紹介された絵図・地図も多い。なかでも，松平文庫に約40点残されているという「検地分間図」（本書では楢原村・恐神村・三ツ橋元村の3点を収録）は，特色あるもののひとつである。これらの検地分間図は，耕地の分布と面積を把握するために，福井藩が明治2年から4年の廃藩置県直前まで作成したものという。家屋・寺社・山林などは近世の村絵図を踏襲した表現方法ではあるが，耕地については「以1分為1間」の縮尺で測量されている。壬申地券地引絵図の作成以前において，福井藩が独自にこのような絵図を作成していたという事実は，各筆の地籍を示していない地籍図の前段階の絵図ではあるが，明治期地籍図研究にとって新知見ではないかと考えられる。

このような約40点現存するという「検地分間図」と，百数十点にものぼるという飛騨郡代支配の天領の村々を描いた天保年間の「耕地絵図」をすべて収録した村絵図集の企画も望まれるところであろう。

最後に，本書に収録された主要な絵図が，「描かれた越前若狭——江戸時代の絵図」展として平成元年4月28日から6月4日まで福井県立博物館で展示されたことを付言しておく。

（小野寺淳）